



聖樹の森

岩井 薫

巨大な山脈の麓から森は始まり——牛乳の表面に固まる皺だらけの皮膜を思わせる、岩肌の無数の擦痕が誘い入れる水河渠の迷路の奥に突きつけられた水の刃、これが滾々と湧いて森を育む水源である——清冽な水流や湖沼によって僅かな裂け目を呈しつつも、幾百里におよび丘陵や平原をのみつくして拡がり、大砂塵の吹き荒れる珪酸質の曠野の始まる所でそれは尽きている……。

森をさまよう不思議な旅人が聖樹と呼び、その意味を知らない《森の子ら》がムルノキと呼んでいるのは、幹囲十米、樹高五十米に達し、濃緑色の光沢ある大きな楕円形の葉が樹冠に茂る巨大な常緑高木である。初夏、枝端に咲く花は径三十糎、瑩白色の八片の花弁が平開し、花心に多雄蕊に囲まれて直立する子房が花後、長さ二米もある剣の鞘を立てたような長莢状の乾いた果実となり、《森の子ら》はこの果実を食物とし、森をさまよう旅の者はその種子を求める。

小葉が羽のように並んだ茎を聖樹に絡ませ、茎頂に淡紫紅色の花を咲かせているのはジャコウカズラである。花筒の口が五裂し、赤斑のある大きな副片が垂れ、狭小な四片が振れて立つその花は、よく蜜を分泌し強い芳香を放つので蝶を誘い、翅表がびろろど様黒色をしたオオヤマヒメが後翅外縁近くの七つの紅色弦月紋と長い尾状突起を裳裾のように翻して飛来し、前後翅に連なる銀白色帯があるギンスジタテハや朱色のアケボノマダラ等と争って吸蜜しているのが見られる。

森の木蔭には羊齒植物が群落をなし、銀白色の斑が爬虫類の紋様のように入った細葉のジャモンシダや、黒褐色の斑入りの大きなヒョウモンシダが地を蔽って繁茂している。葉をよく見ると左右に伸びた異様に細長い四翅を羊齒の複葉に擬したシダムシがじつとしてゐる。羊齒の下には、遠い昔、森を抜けようとした交易商人達が残した荷車の残骸が海底の難破船のように横たわり、腐蝕して溶けかかった、人物の肖像を刻んだ山なす銅貨や交易品の残滓などが散在し、また古い人骨が、敗退して森に逃げ込んだ軍団の末路であろう、ぼろぼろに錆びた武具をまとったまま白く晒されている。

森をさまよう旅の者は《影》と名乗り、単独か、あるいは二人か三人連れて荒野の彼方から聖樹の種子の採取が目的ではるばるやって来る。毛織の粗末な外衣に革のサンダルを穿き、野営に必要な旅仕度（火打ち石、錫の小鍋、乾燥豆等）を背囊に入れ、「聖樹の呼びかける声」を尋ねて旅をするという。

初めて森を目にした《影》は、《森の子ら》の幼い者が生れて初めてオオヤマヒメが蛹から羽化する姿に接した時に似ている。空遙かに枝を伸べ、地の闇、影の領域に深く根を下した聖樹について、彼はおびただしい時間を費して熟考し、想像し、夢見てきたのであるが、たとえば聖樹の「森の聖樹は至る所に隣り合って立つ、同じ一つのものである。相識することの決して無い、同じ一つのものと呼びかける声が、森の中では常に同時に、あらゆる所から聞こえてくる」という一節を、今まで自分がいかに誤って解釈していたかに気づいて悄然とするのである。

森に着いた《影》を迎えるのはまず多くの鳥類である。朗らかな連続音を樹間に反響させ、長い嘴で木の幹を叩く白い胸のククノチ。澄んだ声で優雅に囀る小鳥達——鮮黄色の胸、黒い上体に白斑のあるホシビタキ、聖樹の小枝の枝わかれした所に釣鐘形の巣をつくる琥珀色の可憐なクラモチ、そして、森を颯と吹き抜ける風が紫地に鮮美な臙脂斑のある軽い翼を吹きあげるヒシヌイ。また、林間の沼や溪流等の水辺で水棲昆虫や小魚を狙って飛翔する翡翠色のルリセミがいる。

昆虫類も多い。金緑色光沢のある翅鞘に赤銅色の円形紋を持つ細長いタマツクリや、黒い小紋を散らした朱紅色の翅鞘もあざやかに、後部に反った触角を長くひきずるコニキシ等の甲虫類。透明な翅に褐色の斑紋があり、異様に長い触角を振ってばさばさ飛ぶツノゲラ、展げると三十程もある薄紗の翅に砂金をまぶし、金泥を刷った巨大な複眼と金の矢のように細長い胴部をしたコガネヤンマ……。

夕映えの光が聖樹の梢を茜色に染める頃、《影》は野営の準備に忙しい。薪を集め、樹の根方や大きな樹洞に枯葉の寢床を作り、水を汲んで乾燥したノラマメを煮るだけの簡単な食事を済ませる頃にはもう、陽は沈んであたりは暗くなり、営火に誘われて、枯葉色のマガラコノハ、全身黄色で触角のみ赤いウコンシタバ、そして体は紅色で太く、翅は緑地に真珠層様の銀色波状紋があり、細長く反った前翅端を豪華な衣裳のようにはためかすヨミスズメ等の蛾類が集まって来る。

そして夜の生き物達が活動を始める。小鳥の巣を狙う敏捷な小獣ノズチや、草叢に潜み細長い鎌首をもたげる爬虫類のイヒカ、草の実を噛む小動物ツラネ、沼の緑藻類の中にゼリー状の卵塊を産み、夕暮れから喧しくキュルキュルと鳴き始めるカワボウズ、音も無く闇を飛翔しては鋭い

嘴と趾でツラネやカワボウズを襲う猛禽のアカメズク等の大小の目が闇にせわしく点滅する。

朝、立ち籠めた霧を幾条もの光の幅が刺し貫き、樹の幹の窪みに蘚苔類でつくった椀形の巢に青緑色をした球形の卵を産むヒシヌイが囀る頃、《影》が枯葉の寢床で目を醒ますと、《森の子ら》が集まって、夢の番人達のような風情でおとなしく待っている。《森の子ら》はその名の通り大部分子供ばかりの奇妙な種族で、平均寿命は十五、六歳位であろうか、成長して子供を産むとほとんどの者が死んでしまい、赤児は兄や姉達の手で育つ。木の棘で留める簡単な衣服を木の皮で作って着るが、裸足で、生まれてからずっと伸ばし放しの髪にジャコウカズラの花を飾っている。

《影》が聖典を読んで聞かせると、《森の子ら》はムルの実の枯莢にカムズミの漿果を詰めて発酵させた酒を嬉しそうに回し飲みしながら《影》のあとについて繰り返す——

聖樹の種子 翼ある星よ

洞穴に隠れ籠った秘密の言葉の種子

蔓で編んだ揺籃に眠る星の種子

至る所から長きにわたって吹き寄せる風に乗って旅立つ……

聖典を読んでしまうと、《森の子ら》は聖樹に攀じ登って樹下にいる《影》の所へ次々とムルの実を投げてよこす。

固いまっすぐな実は厚い莢えいになっており、その太さは腕位、長さ二米もある。莢の尖端は秋に熟して裂け、白い冠毛をつけた種子の束が絮わたになって飛び立つ。《影》が求めるのはこの飛び立つ前の種子の束で、この部分だけ小刀で削ぎ落として小さな皮袋に大切に詰め、あとは《森の子ら》に返すと、果肉は食用となり、枯莢は瓶びんの用をなすのである。

ムルの実を腹いっぱい食べ、カムズミの酒に酔いまどろむ《森の子ら》をイヒカやノズチを防ぐために作られた樹上の寢床に残して、種子を手に入れた《影》は背に稲妻の光を浴びて森を去らなければならない。彼は首から下げた小さな皮袋に、ただ木の種子を入れたのみならず、「闇における生命の閃光せんこう、彼自身の意志の源である深い夜の意識に封印された中心の星」が肉化したものを手にしたのであるから……。

聖樹みかどの実の収穫が終り《影》が去った後、ジャコウカズラの花が散り、宿存花柱が羽毛状に残る。それは森のそこかしこで枯れた茎にだんだん白色を呈し、午後、垂れ籠めた雲の裂け目から落ちてくる光線に映じて雪の花のように輝いている。

聖樹の実の収穫が終り、ジャコウカズラの花が散り、宿存花柱が羽毛状に残る。それは森のそこかしこで枯れた茎にだんだん白色を呈し、午後、垂れ籠めた雲の裂け目から落ちてくる光線に映じて雪の花のように輝いている。

秋は遠く林道に樹影を揺らし、
 晴やかな空に木々の影を映し、
 知事とルーツから翌足のすけい記をへ、
 動物の足跡をたどる。『昔は笑う！』は
 真夏の暑さや懐かしい空気を、
 犬のヤブでくま印りささげ、
 思春期に記の旗をよる……

はすも前の走馬
 赤いまじゅう
 拍撃する遊歩の
 無主へ舞いおち
 舞ひつる羽撃の
 と想のく見聞の
 樹影の影の影の
 拍撃の影の影の
 とはのく犬印の
 真夏の遊歩！
 ふるよる余白の

オムツの
 白

